町民文芸

只見短歌会　令和四年七月詠草

老の日のひと日を友と連れ立ちて出湯でなごみぬ心のままに　馬場　八智

コロナ禍で集ひも久し年なりに家事細々と皆を思ひつ　関谷登美子

お前には負けぬもの有り齢だと姑は我が背でくくと笑ひし　目黒　富子

窓の外飛びゐる蝶に幼な猫狙ひ定めて硝子に向かふ　新国由紀子

「お帰り」や「ただいま」などと隣人と交わす言葉に日々を楽しむ　渡部ヨリ子

一年と三年生の男の曾孫二人仲良くゲームを止めず　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　七月定例会

日高俊平太　指導

土を寄せちらちら白き豆の花
宵ながら里のしずけさ月涼し　礼

紙おむつだけで駆け出す庭プール
トマト茄子曾孫のごはん招ばれけり　一穂

「ペダル踏めたよ」初夏の孫が来て
梅雨の月父のかたみのすずり箱　都

濡れ土の新じゃが掘りて夕餉かな
夏空を背中一面追肥かな　修一

歯科院の小窓にせまる梅雨の雷
長湯して一人となりぬ誘蛾灯　味代子

日に焼けた小童の明眸晧歯
立ち止まって見る只見線の炎暑　信

灯籠に数珠つなぎかな子蟷螂
穴だらけ輪郭だけの酸葉かな　紺青